はしがき

平成５ (1993) 年 解剖学教育者としての43年間の役目を終えた．最後の任地 防衛医科大学校を定年退官してから既に19年が過ぎようとしている．大学で人類学を専攻した私が，学部１年次の必修教科として，医学部医学科の基礎医学を履修したとは言え，卒後，解剖学講座に席を置き解剖学教育と研究の道に進み，さらに日本解剖学会解剖学用語委員，また日本医学会医学用語管理委員会委員として，「解剖学用語」と「医学用語」に深く関わり，多くの時を過ごそうとは思ってもみなかった．

大学に入学し，専門課程に進むと，学生は新しい専門用語に悩まされる．ヒトに関わる科学 (医学，歯学，パラメディカル，人類学，人間工学など) の教育機関で，まず出会うのは「ヒトの構造に関する領域，解剖学」の用語である．さらに生理学，生化学，衛生学，病理学などの，基礎・社会医学用語が続く．その後，臨床各科や各専門領域の用語が追い打ちを掛けてくる．

「解剖学用語」は，比重は違っても，医学や人間科学用語の基礎である．それを越えると，以後の専門用語は比較的容易に理解できるだろう．解剖学用語は「生物学用語」に関連している．しかし「生物学用語」には，それまでの教育で多少慣れていても，「解剖学用語」の理解と習得には，それなりの，新しい覚悟と時間が必要である．

「国際解剖学用語」は，1895年に制定されて以来，ラテン語を用いてきている．昔はともかく，最近は，基礎医学の教育時間の相対的減少から，医科系の大学でもラテン語の教育は省略されることが多い．まず見慣れないラテン用語に抵抗のあることも事実である．戦前の医学教育では，日本の近代医学の歴史からも理解できるように，併せてドイツ語が多用されてきた．専門によってはフランス語も用いられてきた．

戦後 事情が変わり，最新の国際解剖学用語委員会編 の "Terminologia Aantomica [TA] (1998)" では，ラテン語用語に英語用語が添えられている．日本解剖学会篇の「解剖学用語 (2007)」も，日本語用語にTAのラテン語と英語用語を併載している．日本医学会編の「医学用語辞典 (1991)」は，欧米語として英語を採用し，解剖学用語のラテン語を除いて，初版 (1975年) 以来添えられてきた他の外国語を削除した．従って「和英」と「英和」版が刊行されている．

近年，解剖学教育においても，一部の大学では，ラテン用語に代えて英語用語が使われている，という．英語用語は，実はラテン用語の翻訳であり，単語そのものの多くはラテン語やギリシャ語に由来している．対応，翻訳の方法も統一されていない．しかし近い将来，基本用語は兎も角，実用的にはラテン語医学用語は死語となるかも知れない．また，各国で，古くから，国際用語に対応する自国語用語が用意されている．今も昔も日本では，実用的には，日本語用語が用いられてきている，しかし，日本語用語も，初めての用語が多く，自体易しいとは言い難い．

医学用語はあくまで学術用語であり，専門用語である．必ずしも，総てのヒトに容易く理解できるようには考えられていない．用語の目的は，一事象一用語を目的に，事態を正しく，正確に，認知できるように用意されている．天職としてその道を選んだ者には，徒に毛嫌いしている訳にはいかない．専門家同士は勿論，専門外のひとにも，状況に応じて，事態を連絡，通訳できる能力が必要である．まず，専門家自身が，用語を十二分に理解しておくことが大切である．

幼児期に，初めて習った文字の読み書きや，数字の理解に，どれだけ喜びを感じたか思い出してほしい．そこから総ての学問が始まり，文化に接することができたのである．

退官の時が迫って，私用のコンピュータ内の記録を整理していると，研究資料とともに，講義資料，各種委員会資料などが，雑然と残されていることを知った．委員会資料には解剖学用語委員会と医学用語管理委員会委員の資料が多く，講義資料には担当の解剖学と人類学のほか，防衛医大の新入学生に対する「大学とは」「医学とは」，他の大学の非常勤講師としての多様な特論，「臨床人類学 (島根医大)」や「形態学方法論 (東京医歯大)」など，があった．

資料を少しずつ見直しながら，手を加え，整理してゆくと，数ページだった断片やノートが結構膨らんできた．できるものなら，纏めて，知己に御覧にいれられないものかと考えた．こうして粗原稿「解剖学用語

雑話」が出来上がったのは平成３ (1991) 年のことである．さらに幾つかの話題は，他の教育者の参考になるのではないか，残せれば残したいという思いが生じた．定年退官後，暇に任せて，手直ししたものが改訂初稿 (1995) で，２年後のことである．

平成15 (2003) 年 第108回日本解剖学会総会 (福岡) のシンポジュウム「医学教育における解剖学用語」において，「解剖学用語の変遷」という話題が私に課せられた．これが古い原稿を思い出す契機となり，改訂初稿の該当部に手を入れて口演の責を果たした．この時，筆を加え，第二稿 (2007)，第三，第四稿 (2008) を経て，一応脱稿し，櫃に収めた．平成20 (2008) 年 第113回日本解剖学会総会 (大分) のシンポジュウム「解剖学の歴史と用語をめぐって」において，「解剖学用語委員会の歩み」と題して再度口演する機会を得た．「第四稿」から用意した口演原稿は解剖学雑誌83巻 (2008) に掲載された．

これを機会に，再び話題に手を加え始めた (第五稿，2009)．これまでの改稿から，一篇としては紙数の増加が心配されたので，二分することを考えた．用語に関する話題を「解剖学用語—史と語—」として纏め，体裁を整えて第六稿 (2010) とした．残部は題を改めて編集することにした．第六稿をさらに３章建てにした第七稿 (2010) を，試みに数部プリントアウトして，知己に送った．日本医師会からはブログに発表したらと示唆され，姿勢研究所から活字化を進める話が起こった．ご厚意に甘んじ，活字化を目標に，再度通読して整備したのが第八稿 (2010) であり，体裁を決めたのが第九稿 (2011) である．

原稿は「一太郎」を使って作製されたが，印刷化に即して，一般的な「Word」に変更するよう示唆された．しかし変更は容易ではなかった．漢字について書いているので，「常用漢字」出現以前の固有名詞にはなるべく旧漢字を使っている． 旧漢字や戦後の拡張新字体は，必ずしもコンピュータの活字に用意されていない．悪戦苦闘の間に，さらにより読みやすいように，章立てを５章に変えることにした．即ち，第一章「医学と解剖の歴史」，第二章「医の教育」の歴史，第三章「解剖学用語」と用語集の変遷，第４章「用語と用字」の問題，第五章 解剖学「用語雑話」とした．委員会の記録のほか，資料の多くは，講義や雑談の為に蒐集した記事やノートである．(「」内は各章の題名)

医学史や語学の専門家でもない，私の講義ノートに基づく原稿は，雑読の生半可な知識であり，付け焼き刃，引き写しに過ぎない．時には我流の幼稚な意見を添えたりしている．勝手な理屈を付けて，どうにか筋道を付け，読み物とした雑文に過ぎない．最近の書物は兎も角，古い資料ほど，出典を必ずしも正確に記録していない．いちいち出典を挙げられなかったことをご容赦願いたい．乱読した，自宅の書架と大学から引き上げた書籍から，本稿に関係すると思えるものを参考文献として末尾に羅列した．退官後，書籍，文献の整理は遂に終らずにきている．発見できなかった書物もあるだろう．著者各位に，心からお礼申し上げる次第である．

作製の歴史からも，本稿は全体的な統一や，記述の方法や文章に一様性を欠き，時には重複，前後し，甚だ読みづらく，理解しにくい体裁となっている．第三章と第四章は，解剖学用語に関心あるひとを除いては煩雑であり，冗漫であろう．専門用語や言葉に興味を示される方々に，拾い読みされるもよし，暇つぶしや寝床での睡眠薬代わりにでもされれば幸いである．

最後に，私の理解不足や判断の誤りからの誤謬，最後まで悩まされた，ワープロ作業に伴う誤字，脱字，仮名遣いなど，誤記も多いと心配される．ご指摘を戴ければ幸いと思い，願っている．今後とも手元に「控え」を残して，訂正と加筆を続けたいと考え，望んでいる．

2011 (平成23) 年９月９日

木村　邦彦